

法人全体のまとめ

この1年、新型コロナウイルス感染の影響がポレポレにも様々な影響を及ぼしました。法人では、いち早く法人内での感染対策指針を出し、現在まで、施設内での感染者は出なかったものの、今後は、どのようになるかは予断を許しません。そのような中、令和2年の活動が下記のように展開されました。

1 新型コロナウイルス感染拡大の影響。

- ① 社会福祉法人ポレポレ設立10周年の「感謝の集い」（6月予定）を中止
- ② 法人全体研修会の中止（2月30日予定）
- ③ ハーモニーまつり（生活介護事業所独自企画）
- ④ ポレポレハウス（就労継続支援B型事業所）の販路縮小
- ⑤ ハーモニー（生活介護事業所）の喫茶店休業
- ⑥ ポレポレ祭（利用者・家族・各事業所・近くの住民との法人全体の交流目的）の中止
- ⑦ わとと（地域活動支援センター：文化交流を目的とした土曜日活動）の事業休業
- ⑧ 利用者の利用控え（主に放課後等デイサービスにおいて）

2 定員確保と事業所連携

- ① 放課後等デイサービスでの支援を就労継続B型事業所（ポレポレハウス）と生活介護事業所（ハーモニー）への実習につなぐ活動が開始された。
- ② 上記活動の中、放課後等デイサービスから令和3年4月、3人が生活介護事業所と生活介護事業所を利用。定員確保に向けた取り組みに成果を上げた。（2つの事業所に地域からその他3名が利用）
- ③ 放課後等デイサービスと児童発達支援事業所も年間の支援の充実のなかで、令和3年に向けて利用者の確保が順調に進み、げんき（小学部）では定員に達した。
- ④ 全体として定員確保に成果が見えてきましたが、年間を通して、利用をやめる利用者が3名出ており、日常の中で利用者が安心して、喜んで通える支援をするにはまだまだ支援の在り方や、ゆとりある職員配置・研修・職員の支援共有などの問題を見つめる必要があります。
- ⑤ 長年の利用者の高齢化や、心身の状況により、当事業所よりもご本人にとって支援が深くできる施設へつなぐことが必要になってきている方も出てきており、その役割を相談支援センターとつながりながら進めていくことの重要性を感じる一年であった。そのことにより、常に利用者の減少があることを見つめる必要を実感した。

3 職員のやりがいと定着

この一年、法人全体で7人が職場をさりました。ほとんどが非常勤職員です。やめる理由は様々ですが、職員が定着するためのリーダーのはたす役割や常勤職員を増やすこと事業所の継続をはかる等、今後の課題が見えてきています。

4 ポレポレハウス・ハーモニー（大人の事業所）に「労働と楽しみ」を実感できる取り組み。

- ① ハーモニー（生活介護事業所）では、複数の職員の持っている音楽の文化を演奏による定期的音楽会につなげ、利用者さんと楽しい時間を持ってきた。
- ② ポレポレハウスでは、生産活動と販売活動に追われる日常の中で、職員にゆとりが見られず、利用者が「労働と楽しみ」が実感できるまでの支援ができなかった。職員確保を目指すことや、現状でも楽しむことができる企画力の向上を目指す必要が見られた。
- 5 10か年計画と放課後等デイサービスげんきの施設建設
- 第2生活介護事業所の建設に向けて討議の結果、希望者の状況と現状の職員の確保に余裕がない状況下、時期を見定めていくこととした。その間を縫って、放課後等デイサービスの「げんき」が3年後に建設される予定の日進「道の駅」の予定地の裏にあことを考慮し、「安全確保、大家さんから契約終了の意向が伝えられている、施設環境の改善」等を検討し、令和3年度に施設建設をしていくことが理事会・評議員会で認められた。
- 6 機関紙の定期発行と法人を支える賛助会員制度の構築は次年度に持ち越された。

就労継続支援 B 型事業所 ポレポレハウス

1.利用者状況

(定員 20 人)

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
開所 日数	22	19	22	23	16	21	23	21	21	20	20	23	251
延利用 者数	297	277	311	299	213	300	306	282	267	255	284	347	3438
1日 平均数	13.5	14.6	14.1	13.0	13.3	14.3	13.3	13.4	12.7	12.8	14.2	15.1	13.7

(1日平均利用者数 13.7人)

2.活動報告

①視覚化支援

- ・新たに利用者される人には、個人ホワイトボードを活用し、1日の作業の流れが分かるように提示して、ポレポレハウスの作業に慣れることができるように支援している。

②作業内容

- ・新型コロナウイルス感染症の影響で内職作業の受注数量も減少したことにより、空いた時間で刺し子の縫製作業に取り組みエコバッグを作成するようになった。
- ・新型コロナウイルス感染症の影響で施設へ販売のための出入りが禁止になり、製造量を縮小して食品ロスを出さないように調整した。

③地域イベントの活用

- ・新型コロナウイルス感染症の蔓延のため地域のお祭り、イベントが軒並中止となり、売上が激減してしまった。

④利用者が主人公になるために

- ・新成人の利用者がおり、公の式典に参加していくことが難しい人たちのため、法人で成人式を催し、事業所の職員・利用者・保護者で成人の門出をお祝いすることができた。

⑤社会人研修

- ・利用者研修として、11月に新型コロナウイルス感染症対策を施しながら、名古屋港水族館に社会見学に行き、コロナ禍での気分転換を図った。

3. 成果

- 「主人公は利用者である」を原点とした支援を心掛け、作業内容のやり方を確認しながら、準備や作業に利用者が進んで取り組めるような環境をつくり出している。また、利用者同士で作業を助け合ったり、相談し合ったりする姿がみられるようになってきた。
- 新型コロナウイルス感染症の影響で内職作業の受注数量も減少したことにより、空いた時間で刺し子の縫製作業に取り組むようになり、それまで針を触ったこともない利用者さんが針を使った作業ができるようになった。
- 販売においては、新型コロナウイルス感染症対策で施設への出入りが禁止となり、製造量を調整して、原材料コストと食品ロスを抑えた。
- 農作業では、ネギの種まきから始め、苗植え、収穫を行いお好み焼きのねぎ焼の材料として使うことができた。また、スイートポテトの原材料として、紅あずまのサツマイモも栽培し、原材料の一部に充てることができた。
- 帰りの会で今日の取り組んだ仕事を報告し合ったりすることで、自分の仕事について意識をもってもらい、仕事に誇りが持てるようになってきている。

4. 見えてきた課題

- 利用者の生活環境が安定しているかどうかで、就労に落ち着いて取り組めるかどうかが決まるため、利用者のニーズを把握しつつ、家庭や他事業所、行政などと連携を図り、安定した日常生活が送れるように働きかける必要がある。即、改善できるものばかりではないので、支援をしても難しい場面が多くみられる。
- 職員がこの数年定着しておらず、職員の入れ替わりがあることで、作業の支援内容を深めることが難しく、職員定着が図れるような職場内の職員交流や業務改善を促す取り組みが必要である。
- 現状での作業内容や販売の仕方では、利用者が定員を満した時に、今の工賃を維持するのは難しく、現状の収益から支払い可能な工賃額は時給150円が妥当であり、現状の工賃を維持していくのであれば、収益性の高い作業を作っていく必要がある。
- 「楽しく仕事をしながら、社会の役に立つ」をコンセプトに支援をすることと、利用者工賃の向上を目指しながら就労支援をすることが、今の手法では両立できていない。
- 障害支援区分が区分3以上の利用者が増えてきており、就労支援の比重よりも生活支援の比重が高くなることが予想され、職員の支援力の質的向上を図ることが急務である。

1. 利用者状況 (定員 20 名)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
開所日数	22	20	22	22	16	21	23	21	20	20	20	23	20.8
延利用者数	416	376	458	428	316	411	432	408	378	376	387	442	465
1日平均利用者数	18.9	18.8	20.8	19.5	19.8	19.6	18.8	19.4	18.9	18.8	19.4	19.2	19.3

【1日平均利用者数】 19.3人

【登録者数】 24人

- ・4月 放課後等デイサービス デイサービスポレポレを利用されていた方が1名入所された。
- ・今年、11月精神障害の方が1名退所された。

【障害別人数】

障害種別	精神障害	知的障害 (自閉症含む)	身体障害	(若年性認知症)	合計
利用者数 (人)	2	20	1	1	24

2. 活動報告

コロナ禍における制限された活動

- ①登所時に検温、手指消毒を行い、ご本人様及びご家族様の体調についての確認をする等、コロナ感染症対策を徹底して行った。マスクを着用出来ない利用者様のマスク着用の練習も日課の中に取り入れ、習慣化に努めた。
- ②送迎を基本、保護者送迎に変更。(送迎ができない方については応相談で送迎を実施)
- ③各班、施設外活動は控え、施設内での活動を充実する工夫を行なった。天気の良い日は『共生の庭』で歌ったり、踊ったりして音楽を楽しんだり、周囲をみんなで歩くという運動プログラムや公用車の洗車を作業プログラムに取り入れた。
- ④喫茶営業は4月・7月のみ。(5月・6月・8月以降休業)。地域のイベントやお祭りも中止で授産製品の販売も停滞。授産収入が見込めなくなり、9月分より工賃支給なし。工賃支給の代わりに各班で『お楽しみ会』実施。喫茶でお茶を楽しんでいる。
- ⑤毎週金曜日の午後を余暇活動とし、各班で1週間のお疲れさま会をしている。

3. 成果

- ・コロナ感染症対策を施設内において徹底することで、日課の中で、手洗い、手指消毒、マスクの着用等の習慣が身についてきた。そのため、利用者職員共インフルエンザ感染者はゼロ。『コロ

ナに感染しないように』という思いで過ごしているため、利用者自身も日常的に健康管理を意識するようになってきている。

- ・今年度4月に植えた芝ざくらが見事に開花。コロナで疲れた心を癒してくれた。来年は地域の方にPRしたい。

4. 見えてきた課題

①常勤職員を確保し、事業所体制の安定を図る必要がある。

(現在職員20名中、常勤職員は、2名)

②9月分より利用者の工賃ストップ。イベントの中止や喫茶営業の休止により授産製品の販売ができていない。喫茶営業に頼らない販売活動の構築が必要。

③コロナ禍で地域の方との交流が停滞している。喫茶営業もさながら、四季の里を活用し、コロナに負けない元気なハーモニーを見せていきたい。

共同生活援助事業所 なしの木ホーム

障害者の自立生活を支えるなしの木ホームは、新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐためにできるだけ、個人の部屋で過ごすように支援してきました。その結果、かえって一人一人が自分らしい時間を持つことが出来るようになってきました。また、入居3年目を迎え、個々の自立した生活への支援、健康を管理する支援などに取り組んできました。

1. できることを増やし、達成感と自信が生まれる支援に取り組む

「やればできる」人には、日常生活の中で、洗濯・シーツの取り換えなど、徐々にできることを増やす支援をしていく中で、今まで一人で街に買い物に行くことが出来なかった入居者が一人で行けるようになってきて明るい気分になる状況も生まれています。

2. 健康管理への支援

50歳を過ぎてきた入居者がいる中、血圧が高い、甲状腺に心配が見られる等の健康上の問題も見えてきました。健康に暮らしていただくことは、ホームの役割として重要な支援の一つとして位置付けました。コロナ禍で病院受診に不安があったことから、ご家族支援が困難な方が、訪問診察を受けることになり、医療機関との連携も進みました。また、日常は、看護師の配置で健康をチェックしています。

各部屋で、菓子類や賞味期限切れた食べ物を食べている

3. 土曜日・日曜日の開所

入居者がホーム生活に慣れてきて、土・日曜日の開所を望む声が増えてきていますが、令和2年度も開所に至りませんでした。主な原因は、職員確保の困難にあります。課題が次年度に持ち越されました。

4. ご家族との共有

ご両親・兄弟と家族との関りは入居者の皆さんが人生上で重要なものです。家族の関りをつなぐ活動は、次年度に持ち越されました。

5 なしの木ホームのガイドラインを作成

手探りで始めた支援の中で、目的や意義の今一度の確認や検討・ホームでできる支援の限界をどうとらえていったらよいのかなどを検討しました。職員が支援にあたるうえで指針となるものです。しかし、その内容が制度的に妥当なのか今後検証し、見直しを重ねることでより現実的なものにしていく必要が見えています。

6 家賃の見直し等を検討

全体の収支を検討し、家賃の見直しをしてみました。土・日開所の地域の事業所と比較し、家賃は低いものの、土曜日・日曜日の開所が行われるようになってから再度検討することになっています。

7 地域との連携

相談支援を通じ、自宅へのヘルパー派遣や病院受診の同行等、土曜日、日曜日において利用できる資源がなく、生活のニーズに応えられない事案が多く見られました。グループホームの支援の中で、障害者の生活を支えるには、インフォーマルな支援を含めて安心して暮らしていける地域資源が日進市にもっと必要であると強く感じた。

短期入所事業所 チャレンジホーム

職員の負担を考えると、まずはグループホームの支援の充実に力を注いできたため。令和2年度は、利用が少なかった。しかし、令和3年度に向けては受け入れをしていくという確認が職員間でできてきた。後期になり連続して利用された方が、利用にあたって、健康状況や生活状況・服薬状況等多方面のアセスメントを行い、支援センターとも情報を共有し、それを事前に職員に報告して受け入れることが出来た。体験の利用者が落ち着いて過ごすことが出来たこの取り組みを広げ、一人の方が定期的に利用できる支援に向かいたい。

地域生活支援センター わとと

1. 営業について

今年度、コロナ禍において、営業を休止した。

2. 今後の課題

障害を持っている方への日常的な日中活動の保障という点において、活動の必要性はあるが、ポレポレの職員体制専属職員がいないため、現状のコロナ禍においては、休止方向で考えざるを得ない。令和3年度の活動についてもコロナ感染症拡大の収束状況を鑑みて、検討していく。

児童発達事業所 なかよし

(定員4名)

1. 利用状況

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
延べ利用 人数	18	17	30	33	8	28	38	44	45	47	46	40	394
開所日数	7	6	9	9	2	9	13	11	12	10	11	9	108
1日平均 利用人数	2.6	2.8	3.3	3.7	4	3.1	2.9	4	3.8	4.7	4.2	4.4	3.6

【利用者状況】

今年度は、昨年度まで利用のあった2歳児が幼稚園入園に伴い利用を終了したり、他事業所へ変更をしたこともあり、4月の時点で利用者が減り、開所日も火曜日と水曜日のみとなった。そこに加えて新型コロナウイルスの流行により、4～5月は見学者の受け入れを停止せざるを得ない状態になり、市の行っている検診もストップしてしまったことで、2歳児の相談件数も減り、上半期の利用人数が伸び悩んだ。6月ごろから見学者の受け入れを再開し徐々に利用者が増えてきた。今年度は4歳から6歳の見学が多く、2歳児が少ない傾向があった。そのため、母子での通所予定であった金曜日を単独通所に変更し10月より開所した。その効果もあり、週3日の営業日は定員を満たすことが出来た。当初月曜日の開所も予定していたが、職員が不足していることもあり、開所には至らなかった。

2. 活動報告

主担任を配置して取り組んでいることで、内容が深まっている。

集団を意識した活動内容を会議や朝のミーティングで話し合うことが出来ている。

四季折々の活動を行い、工作や活動に盛り込んでいった。また、支援員と子どもが触れ合って遊ぶふれ合い遊びを多く取り入れ、家庭でも出来る遊びを伝えてきた。

新型コロナウイルスの状況を見て、野外活動(動物園への遠足)も行うことが出来た。

問題がある利用者に対して保護者の承諾の上、保育園や幼稚園に出向き、必要に応じて支援会議を開催し参加した。

畑で野菜を育て、食育に役立てた。

3. 成果

えがおと一緒に活動を行う時間が増えたことでお互いの支援を見る機会が増え、支援に対する意見交換や支援を学ぶことが出来た。

新型コロナウイルスの感染が広がる中でも出来ることを職員が知恵を絞りだしながら活動を考え、対応を行うことが出来た。

利用者も、10月から徐々に増え始めた。来年度に向けた利用者の見学も増え、4月からの利用者も決まったため、来年度は週3日の定員を満たした状態でスタートが出来る。

4. 今後の課題

- ・職員確保をしていく。(開所できる日数を増やせない)
- ・建物の老朽化
- ・職員育成(現場のニーズに合った研修会の開催)

放課後等デイサービス事業所 げんき
(定員 10 名)

1. 利用者状況

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
開所 日数	22日	18日	22日	23日	16日	22日	22日	21日	19日	20日	20日	23日	248
延利用 者数	182	184	204	193	149	198	191	203	192	182	160	210	2248
1日 平均数	8.2	9.6	9.2	8.3	9.3	9	8.3	9.6	9.6	9.1	8	9.1	9

(1日平均 9人)

【新規利用者】

新一年生 3名

【登録人数】 21名

(学年内訳) 中学2年生1名

6年生7名、5年生1名、4年生2名、3年生3名、2年生3名
1年生3名

(市内内訳) 日進市：14名みよし市：2名長久手市：3名豊田市：1名

(学校内訳) 三好特別支援学校6名 瀬戸つばき特別支援学校3名

市内小学校4校10名 東郷町諸輪小1名

※前年度と同様新一年生が3名入り週4日から2日の利用。中学生2名がえがおに上がったが大きな影響が出なかった。

※2月に入り3名の利用者が入院や登校拒否状況になり利用がなかった。

2. 活動報告

(1) 基本方針について

- ・初めから新型コロナウイルス対策に追われながらの1年間でしたが、利用者の状況は大きく変わらず、学校が休校になった時期も通常通りの利用があった。
- ・自粛中は保護者に送迎をお願いし、営業時間も短くし対応した。
- ・習慣予定に沿って主活動を進めたがコロナウイルス感染を意識すると制限される活動もあり、郊外活動での公園での活動をほぼ中止とした。
- ・夏休みは通常社会体験として公共施設を利用して行事企画を立てるがすべて中止した。水遊びも大きなプールを出すのをやめた。
- ・郊外に出かけられないので、施設の前にある庭を活用し遊びを充実させた。

- ・保護者に対してはコロナウイルス感染対策について丁寧に説明し協力をお願いした。保護者も協力的だった。

(2) 習慣カリキュラム

	クッキング	工作
4月	フルーチェ、綿菓子、ホットケーキ、	ひまわり、ちぎり絵 ちょうちょ、こいのぼり
5月	フルーツポンチ、	とびだせどうぶつの森 カエル（紙コップ）
6月	フルーツサンド、カレーパン フレンチトースト、ピザトースト	うちわ、てるてる坊主 あじさい
7月	フルーツヨーグルトフルーチェ	七夕飾り トントン相撲
8月	カレーライス、	プラバンアート 塗り絵（コスモス）
9月	パフェ、牛乳かん、ミニピザ 白玉団子	絵の具遊び、 お月見アート
10月	スイートポテト、シュータワー かぼちゃクッキー	マスクに絵を描こう
11月	プリンアラモード、ナポリンタン たません、いももち	クリスマスツリー キャンドル、バスボム
12月	五平餅、豚汁クリスマスケーキ	クリスマスカード
1月	焼うどん、ぜんざい、ナポリンタン おばぎ	おにの帽子
2月	のりまき、チョコホンデュ、フォンダ ショコラ、アップルパイ、たこやき	くまのふくろ作り
3月	3色ホットケーキ、ホットドック チキンライス、ケーキ作り 焼きそば	ひな人形 てんとう虫 アルバムづくり

(3) 職員体制

- ・7月に男性職員が1名週2日で配置
- ・3月に臨時パート職員女性職員が1名週3日で配置
- ・常勤職員が結婚により3月末で退職

3. 成果

- ・コロナウイルス感染対策をしながらの営業でしたが利用が減少することがなかった。
- ・営業したことを保護者から感謝された。
- ・新一年生が3人増えたが、すぐに環境に慣れてくれた。
- ・常勤職員を配置できたことで活動の準備が整い、支援内容が充実し安定

した支援が行えた。

- ・コロナウイルス感染により郊外活動ができなかったが、それに代わる活動を考えるきっかけにもなり活動内容が広がった。

4. 見えてきた課題

- ・低学年と高学年との下校時間の差の問題。
- ・活動内容で利用者を分けて支援する環境を整えていく。
- ・高学年の男子に対しての支援にあたり、男性職員を配置していく必要がある。
- ・利用者が平均を平均10人までにする。
- ・送迎車2台が15・16万キロを超えてきているので買い替えを検討していく。
- ・国の定めた職員体制に保育士・児童指導員の有資格者という縛りがあり、職員の人員体制確保が難しい事業になってきている。職員採用時に資格がある人材を採用していく。また、人材育成にも力を入れる。
- ・コロナウイルス対策で見えてきた環境問題として、体調を崩した利用者の待機場所の確保が難しい。手洗い場が狭い、少人数に分けての活動ができないなどの問題が見えてきた。
- ・夏場、午後からの日差しが強くあたることから、室内の気温が下がらず、体温調整が難しい利用者には過酷な環境だった。

放課後等デイサービス事業所 えがお (定員6名)

1. 利用状況

【新規利用者】

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	小計
総利用者数	80	90	103	111	95	117	114	120	116	114	123	140	1323
開所日数	20	17	22	23	16	20	22	21	19	20	20	23	243
1日平均利用者数	4	5.3	4.7	4.8	5.9	5.9	5.2	5.7	6.1	5.7	6.2	6.1	5.4

4月にげんきから中学1年生2名、中学2年生1名、9月にも中学2年生が1名移籍。新規利用の小学6年生が1名。

【登録者数】 16名

(学年内訳) 高校3年:1名、1年:2名、中学3年:3名、2年:6名、1年:2名、
小学6年:1名、小学3年:1名

(市内内訳) 日進市:8名、みよし市:6名、豊田市:1名

2. 活動報告

今年度は新型コロナウイルスの影響により、4~5月の間は臨時休校となった。

火曜日と水曜日はなかよしと時間が被ることもあり、部屋を分けたり、共有スペースを作って活動を行ってきた。共有スペースなどでは交流をすることもできたが、身体の大きな中学生と幼児と一緒に活動を行うことで危険もあった。学校が再開してからは、利用者も利用を再開しだして、定員を満たす曜日も増えてきた。

クッキングや外出体験(買い物)などの活動もコロナウイルスの状況を見て行うようにしてきた。それでも、感染者数が増えてしまい、活動が出来ないこともあり、製作活動や運動遊びを普段よりも多く取り入れてきた。特に午前中には、毎日体操などを行い、休校時の子どもたちの運動不足解消に努めてきた。活動時間が長くなったことで4月から利用を開始した利用者の様子をしっかりと観察し知ることが出来たことは良かった点である。

コロナウイルスに対する感染防止対策では、3密を避け、定期的な手洗い、消毒などを徹底して行ってきた。保護者に対しても、体調が優れない際には、ご利用を控えていただくなど協力を依頼し、日々のコミュニケーションをとってきた。毎日行うことで、今まで手洗いをしようとしなかった子どもたちも自主的に手洗いをしたり、消毒をすることが出来ることが増えた。

車両購入

日本財団の福祉車両補助金は通らず、新車の購入は出来なかったが、3月に中古車を購入し、一台は距離数の少ない車を用意することが出来た。もう一台に関しては、来年度以降も補助金に応募して購入を検討して生きたい。

お手伝いの役割分担

利用者に対して、事業所の中で出来るお手伝い(机拭き、戸締りの確認など)を毎日の日課として行ってきた。個々の能力に合わせてお手伝いをしてもらい、帰りの会でみんなの前でお手伝いをしてくれたことを褒める(ありがとうカードがもらえる)機会を作った。毎日の日課になることで、出来る子は自主的にお手伝いをしてくれるようになった。何より、子どもたちを褒める機会が増えたことがよかった。

3. 成果

- ・クッキングや外出体験が行えない分、自立課題などを作成し取り組むことで個々の様子を把握する機会となった。
- ・お手伝いを日課にすることにより、子どもたちを褒める機会が増えた。
- ・なかよしと一緒に活動を行う時間が増えたことで、職員がお互いの支援を見ることで支援について意見交換をしたり、学ぶことが出来た。

4. 見えてきた課題

- ・職員の補填
- ・施設の老朽化
- ・療育環境の構造化
- ・職員育成

放課後等デイサービス事業所 デイサービスポレポレ
(定員 10名)

1. 利用状況

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
開所 日数	22	18	22	23	16	22	22	21	19	20	20	23	248
延利 用者 数	150	129	146	147	122	159	161	150	138	141	152	164	1759
1日平 均利用 者数	6.8	7.2	6.6	6.4	7.6	7.2	7.3	7.1	7.3	7	7.6	7.1	7

※令和3年3月31日現在

【登録人数】 16名

【新規利用者】 4月から4名（えがおから移籍）、6月から1名、8月から1名

2. 活動報告

作業体験の実施

3月からポレポレハウスでの作業体験を開始した。今まで行っていたハーモニーでの作業体験とは違い、就労系の事業所の作業体験となるため、社会人としての基本的なマナーから学ぶ体験ができた。3月はクッキー作りと刺し子の作業を体験した。コロナ禍ということもあり、着いてからの手洗いからしっかりと行き、ポレポレハウスの職員の説明を聞きながら楽しく作業に取り組むことができた。

公用車の購入

日本財団の福祉車両助成を受け、新たにセレナを購入した。利用者の居住範囲が広くなり、新たに送迎車が増えたことで、利用者を分散することができ、送迎時間の短縮や利用者同士の相性を踏まえて送迎を組むことができるようになった。

3. 成果

- ・生活介護だけでなく就労系の事業所での作業体験を実施できたことで、『就労』ということ意識した体験をすることができた。
- ・公用車の増車により、利用者を安全に送迎できるようになり、職員の業務改善を図ることができた。

4. 見えてきた課題

法人内事業所との連携

卒業後、法人内の事業所に通所することや、作業体験を継続的に実施していくことを踏まえ、成人事業所との連携を積極的に行い、利用者を法人全体で見えていく体制を整えていく。

個々の能力に合わせた活動プログラムの充実

曜日ごとの活動プログラムは定着してきたため、活動の中身に関して、個々の能力に合わせた活動内容を充実させていく。支援が必要な利用者に合わせてではなく、1人で進められる利用者には手順書等を見ながら進めることができるような工夫をしていく。また、全員が同じ内容の活動をするのではな

く、職員数に余裕があるときは個々の能力に合わせて内容の変更等も行っていく。